

|                  |   |
|------------------|---|
| <b>Title</b>     | H.B.ストウ『アンクル・トムの小屋』におけるオーガスティン・セント・クレアの奴隷制について  |
| <b>Author(s)</b> | 森田, 三千代   |
| <b>Citation</b>  | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :12-16  |
| <b>URL</b>       | <a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5434">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5434</a> |
| <b>Rights</b>    |   |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# H.B. ストウ『アンクル・トム的小屋』における オーガスティン・セント・クレアの奴隷制について

森田 美千代

## I はじめに

筆者は、別稿<sup>1)</sup>において、H.B.ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-1896) の『アンクル・トムの小屋 (Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly)』(1852年)におけるオーガスティン・セント・クレア (Augustin St. Clare) のキリスト教について論じた。そのなかで、『アンクル・トムの小屋』は「驚くほど多面的で複雑な小説」であるとレズリー・フィードラーが強調していること<sup>2)</sup>、そして、「多面的で複雑な小説」の要因の一つはオーガスティンの人物造型にあると野口啓子が指摘していること<sup>3)</sup>を、述べた。このことは、オーガスティンのキリスト教についてのみならず、彼の奴隷制についても、そのままあてはまる。

『アンクル・トムの小屋』の小説は、45章から成っている。オーガスティンが最初に小説に登場するのは第14章であり、小説から最後に消えるのは第28章である。そのうち、オーガスティンが奴隷制について小説のなかではじめて発言するのは第16章であり、最後に発言するのは第28章である。

本稿の目的は、テキストに即して、オーガスティンが奴隷制について、どのように考え、またどのように行なっていたか、をみていくことである。その際、第16章から第23章までの前半部分を占める、「知識人」としてのオーガスティンは、奴隷制について、考えていることに一貫性がなかったこと、また考えていることと行うことが一致していなかったことを明らかにする。第24章から第28章までの後半部分を占める、「一人の人間」としてのオーガスティンは、奴隷制について考えることに一貫性があったこと、また考えていることと行うことが一致し始めたことを明らかにする。

## II オーガスティン・セント・クレアの奴隷制について

### 1 「知識人」としてのオーガスティンの奴隷制について

第16章の、オーガスティンの奴隷制についての発言は、日曜日の昼食のテーブルで、その日の教会での説教の内容が、「聖書が奴隷制を支持している」というものであったと、妻マリーが言ったことに対してであった。

もしこの奴隷制という問題に関して私が何か言うとしたら、声を大にしてきっぱりとこう言います。「われわれは奴隷制を支持する。われわれは奴隷たちを確保し、所有し続けるつもりだ。それはわれわれの便宜と利益 (our convenience and our interest) のためである」(158, 220)<sup>4)</sup>。

奴隷制を支持するが、それは、キリスト教が奴隷制を支持しているからではなく、南部社会の便宜と利益のためである。キリスト教と奴隷制を関連づけて考えるべきではないとし、オーガスティンは、「異なるものは、異なる箱に入れておくべきだということなのである」(159, 221) と言う。

次は、第19章である。オーガスティンとオフィーリアとの間で、奴隷制についての意見のやりとりがなされている。

私 [オーガスティン] の考えでは、この奴隷制という抽象的な問題については、たった一つの見方しか成り立ちようがないのです。奴隷制によって金儲けをする農園主たち、彼らを喜ばせる聖職者たち、奴隷制によって支配しようとする政治家たちは、世間もびっくりするほどの巧妙さで、言葉や倫理をねじ曲げ、歪めています。

連中は、自然や聖書や他のなんやかやを自分たちに奉仕させることができるのです。しかし、結局のところ、連中も世間の人も、そのことで奴隷制をもっと信じるようにはなりません。奴隷制は悪魔の産物です (193、266)。

第16章では「奴隷制を支持する」と言い、ここでは「奴隷制は悪魔の産物である」と言い切るオーガスティンであるが、同じく第19章で、彼自身としてはどのようにしているかについて、次のように言っている。

彼ら [奴隷たち] を金儲けのための道具として所有するなんてことは、私にはできませんでした。でも、金を使うのを手伝ってもらうために彼らを所有する (have them to help spend money) というのは、私にはそれほど醜いこととは思えませんでした (201、276)。

奴隷制は奴隷にとってひどいのは当然ですが、どちらかという、[アメリカ南部の] 主人にはもっとひどいのです。(中略) イギリスの資本家や貴族は、私たちのように、自分たちが蔑んでいる階級と混じり合ったりしませんから、私たちのように感じることはできないのです (201-02、277)。

こうしたことの終わりはどうなると考えているかと、オフィーリアに訊かれ、オーガスティンは、次のように応答する。

分かりません。でも、一つのことだけは確かです。世界中で下層の大衆が集結しています。遅かれ早かれ、復讐の日 (a *dies irae*) がやって来でしょう。同じことが、ヨーロッパでもイギリスでも、この国でも起こりつつあります。母はよく私に、キリストが君臨しすべての人が自由で幸福になる千年王国 (a millennium) <sup>5)</sup> がやっ

てくと語ってくれました。そして、私がまだ子供だったころ「御国が来ますように (Thy kingdom come)」というマタイ伝 [6章9-10節] にあるお祈りを唱えるよう教えてくれました。このやせこけた奴隷たちのため息や呻き声や身動きのすべては、彼女の言っていたことが近づきつつあることの予言ではないかと、私はときどき思うことがあります。しかし、キリスト再臨の日 (the day of His appearing) まで、誰が待てる (abide) というのでしょうか (202、278) ?

ここでのオーガスティンの発言は、下層の大衆が上層階級を打倒するという、世俗的復讐の意味と、キリスト再臨の日に審判が下されるという、キリスト教的意味が交錯していて、読者のほうからするとわかりにくい。加えて、「しかし、キリスト再臨の日まで、誰が待てるというのでしょうか?」もわかりにくい。

上述の第19章から複数章とんでいるが、内容としては繋がっているのが、次にとりあげる第23章である。ここでは、オーガスティンとアルフレッドの双子によって、会話が展開されている。まず、オーガスティンが次のように言う。

「そういえば、この国 [アメリカ] の奴隷のなかにもアングロ・サクソン系 (Anglo Saxon) の血がかなりたくさん流れ込んでいるよ」とオーガスティンは言った。「彼らのなかには、アングロ・サクソン系の理詰めの意志と洞察力に、南国的な心情と情熱を重ね合わせる程度にアフリカ系の血を混在させている者がたくさんいるのだ。もしもサント・ドミンゴ [ハイチ] <sup>6)</sup> のような事態が訪れるとすれば、アングロ・サクソン系の血筋を持った者が先頭に立つことになるだろうね。私たちと同じような誇り高い感情をその血管で燃やしている白人の父を持つ息子たちは、これから先売り買いされたり交換された

りばかりはしていないだろうよ。彼らは立ち上がるさ。それに伴って、彼らの母の人種も奮い立たせられることになるだろう」(234、320)。

それに対して、アルフレッドは、次のように反論する。

「くだらない。ばかげている!」(中略)「全体的に言って、オーガスティン、君の才能は巡回牧師向きだと思うよ」とアルフレッドは笑いながら言った。「君に僕らのことを心配してもらう必要はない。所有はほぼ完璧だ。僕らには力がある。この従属民たちは」と彼は、足を踏ん張って言った。「立ち上がれないでいる。将来も立ち上がれないままではいるだろう! 僕らは自分の火薬を管理するだけの十分な活力を持っているさ」(234-35、320)。

以上の、オーガスティンとアルフレッドとの議論を取り上げて、アメリカ文学者の大和田英子は、次のようにその議論を解釈している。

奴隷制支持と奴隷制反対の立場から、互いに正反対の議論を展開するように見える(中略)が、実は、ハイチの奴隷蜂起という同一事象に対するふたつの解釈は表裏一体でもある。つまり、奴隷蜂起の可能性から導かれる「恐怖」を理由に、オーガスティンは「奴隷解放をすべき」、アルフレッドは「解放すべきではない」と論じるからだ。アルフレッドは、「ハイチ人はアングロ・サクソンではない」から支配者にはなれないと主張するが、オーガスティンは、黒人奴隷と白人との混血に言及し、蜂起以外の恐怖、すなわち、混血のもたらす恐怖に言及する<sup>7)</sup>。

同じくアメリカ文学者である大野美砂は、次のように述べる。

このオーガスティンとアルフレッドの会話は、ハイチ革命に触発された黒人たちがアメリカでも暴動を起こす可能性について、二人が不安を感じていたことを示している<sup>8)</sup>。

大和田は、オーガスティンもアルフレッドも、ハイチの奴隷蜂起が引き金となって、アメリカでも奴隷の蜂起が起きるかもしれない「恐怖」を感じていること、またオーガスティンは、蜂起でなくても、「混血のもたらす恐怖」を感じていることを、指摘している。大野も、オーガスティンとアルフレッドの二人が「不安」を感じていたと、指摘している。

しかし、オーガスティンやアルフレッドは、「恐怖」や「不安」を感じていただろうか。テキストはそのように言っているだろうか。筆者は、テキストはそう言ってはいないように思う。オーガスティンは、奴隷といっても彼らには事実上アングロ・サクソンの血が流れており、やがて奴隷制は廃止されることになるだろうと予見している、と読めるのではないか。また、アルフレッドは、「問題にもならない」という自信に満ちてさえいる、と読めるのではないか。

## 2 「一人の人間」としてのオーガスティンの奴隷制について

第24章から、奴隷制についてのオーガスティンのトーンが、がらりと変化する。第24章において、オーガスティンの愛してやまない娘・エヴァが、もうすぐ自分は天に召されるということを予感し、父オーガスティンに、いわば遺言のかたちで、次の願いをする。

「パパ、すべての奴隷を自由にしてやる方法はないの」(241、329)?

それに対するオーガスティンの応答は、以下のごとくである。

「それは難しい問題なのだ、かわいいエヴァ。いまのやり方がまったく間違っているというのは疑いもない。多くの人がそう思っている。私自身もそうだ。この国に奴隷が一人もいなければいいと、私は心から望んでいる。でも、そのためにどうしたらいいかが、私にはわからないのだ」(241、329)！

それに対して、エヴァは、提案する。

「この制度を改めるよう人々を説得してまわることが、できないものかしら？ わたしが死んだら、パパ、わたしのことを考えて、わたしのためにそういうことをやってちょうだい。もしわたしができれば、そうするわ」(241、329)。

加えて、エヴァとオーガスティンの間に、次のような会話がなされる。

「約束してちょうだい、愛するパパ、トムを自由にするって」。そこで彼女は言葉を切り、ためらいがちに付け加えた、「わたしが死んだら、すぐに」(242、330)！

「分かったよ、エヴァ、必ずそうするよ。お前が望むことなら何だってするさ」(242、330)。

オーガスティンは、遺言として託されたエヴァの願いを、実行に移さんとした。第28章で、オーガスティンは言っている。

「いいかい、トム」。解放に必要な手続きを始めた翌日、オーガスティンは言った。「私はお前を自由にするつもりだ。だから荷物をまとめて、ケンタッキーへ出発する用意をしておくがいい」。トムの顔は突然喜びで輝き、天に向かって両手をあげると、勢いよく「主に祝福を！」と叫んだ

(265、361)。

また、オーガスティンは、オフィーリアに、トプシーを譲渡する証明書を渡した(268、365)。そして、「もし私たちが奴隷を解放したら、あなた方は[北部で]喜んで教育してくれますか」(273、371)と、解放された後のトプシーの将来に道筋をつけてやろうとした。

大野は、「オーガスティンは、事故に巻き込まれて若くして突然死亡し、彼の奴隷制に関する見解がどのように発展していくのか明らかにされないまま、作品から姿を消す」<sup>9)</sup>と述べているが、筆者の読みは、大野とは違っている。オーガスティンは、遺言ともいえるエヴァの願いに応えるべく、トムには解放に必要な手続きを開始し、トプシーのためにはオフィーリアへの譲渡証明書を書き終え、オフィーリアにトプシーを託した。

### III おわりに

これまで、テキストに即して、オーガスティンの奴隷制について考察してきた。第16章から第23章までの前半部分を占める、「知識人」としてのオーガスティンには、「一貫性」がなく、「ぶれ」があった。しかし、第24章において彼の奴隷制についてのトーンが一変する。それは、愛してやまない娘・エヴァが、遺言として父オーガスティンに託した願いによるといえる。ここから第28章までの後半部分を占める、「一人の人間」としてのオーガスティンには、思いとそれを実行に移すにあたって、「一貫性」があり、「ぶれ」はなかったといえることができる。

今回、オーガスティンの奴隷制について考察したことで、あらたに研究すべき課題が生じてきた。それは、ジョージ・ハリスのことである。ジョージは、アメリカの奴隷制に反抗し、カナダ逃亡を企てる。それに成功したジョージは、その後カナダからフランスに留学する。ジョージが、アング

ロ・サクソンのイギリスではなく、フランスに留学したのは、理にかなっている。それは、フランスでは、自由と平等を実現すべく革命が起き、その革命が成功したからである。そのジョージが、小説の最後で、次のように言っている。

僕は自分が将来どう進むべきか、いささか迷っています。僕はこの国〔アメリカ〕で白人社会に加わることはできるでしょう。(中略)しかし、正直言って、僕はそれを望んでいないのです。(中略)僕が心から願い、あこがれているものは、アフリカ人としてのナショナルリティです。(中略)それはどこで探したらいいのでしょうか？ ハイチではありません。というのは、ハイチの人々は、そもそもはじめから何も持っていなかったからです。水の流れはその源より高くなることはできません。(中略)それならば、僕はどこを探すべきでしょうか？ アフリカの岸辺に、一つの共和国〔リベリア〕があります。(中略)僕の願いはそこに行き、自分のものだと言える国民を見出すことです。(374、506)。

レイシストでないことを十全には否定しきれないとの評価もあるストウが、ジョージを、ハイチではなくリベリアに行かせたかったのは理解できる。しかし、ジョージ自身は、もしアメリカに留まる道を選択しないのであれば、作者ストウに抗ってでも、リベリアではなく、ハイチを選択すべきではなかったか。これが、次なる研究課題である。

#### 注

- 1) 「H.B.ストウ『アンクル・トムの小屋』におけるオーガスティン・セント・クレアのキリスト教について」『論集キリスト教と諸学』 聖学院キリスト教センター、2015年、158-172頁。
- 2) Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Harmondsworth: Penguin, 1984), 264.
- 3) 野口啓子 『『アンクル・トムの小屋』の政治的感化力

とキリスト教』『アンクル・トムの小屋』を読むー反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃-』 高野フミ編、彩流社、2007年、78頁。

- 4) 英語テキストは、Elizabeth Ammons編の*Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly*を用いる。日本語訳は、主として、1998年に明石書店から出版された小林憲二監訳を用いる。しかし、場合によって、拙訳を用いている部分もあるし、1967年に旺文社文庫として出版された大橋吉之輔訳、1966年に角川文庫として出版された山屋三郎・大久保博訳、1952年に新潮文庫として出版された吉田健一訳を用いている部分もある。引用は、本文中に、英語の頁数と日本語の頁数の順序で示す。訳者名を特に明記していない場合は、小林監訳である。
- 5) 拙稿「H.B.ストウ『アンクル・トムの小屋』におけるオーガスティン・セント・クレアのキリスト教について」の注(8)を参照。
- 6) サント・ドミンゴは、フランスの植民地であったが、黒人たちによる奴隷解放と独立のための運動を通して、1804年世界初の黒人共和国・ハイチとして独立した。浜忠雄 『ハイチの栄光と苦難-世界初の黒人共和国の行方-』 刀水書房、2007年、14頁、22頁。
- 7) 大和田英子 「空白の領域-モダニズムとカリブ海域」『カリブの風-英語文学とその周辺-』 風呂本惇子編著、鷹書房弓プレス、2004年、32-33頁。
- 8) 大野美砂 『『アンクル・トムの小屋』とアメリカ・ヨーロッパ・ハイチ・リベリア』『越境する女-19世紀アメリカ女性作家たちの挑戦』 倉橋・辻・木戸編、開文社出版、2014年、170頁。
- 9) 大野、176頁。

(もりた・みちよ 聖学院大学大学院客員教授)